
鳥文斎栄之の美人画
—画風の形成と、独創的表現の確立—

鳥文斎栄之（1756～1829）は、喜多川歌麿に拮抗して美人画表現の可能性をひらいた江戸後期の重要な浮世絵師である。天明から寛政にかけての浮世絵黄金期に活躍し、数多くの錦絵や絵画（肉筆画）を発表した栄之だが、その錦絵作品に関する研究の蓄積は決して多いとはいえず、作例の制作年代や絵師の画風形成に関する考証も十分ではない。例えば、栄之の本格的な活躍期は一般に、歌麿による大首絵の爆発的隆盛の直後とみられている。しかしながら実際には、五枚続の豪華な続絵を手がけるなど、天明期の時点で既に数多くの錦絵を制作しており、同時代美人画の雄である鳥居清長の単なる模倣に終始しない足跡も遺している。本発表では、周辺絵師の作品群と比較等の手法を用いて、栄之の天明から寛政初期にかけての錦絵美人画、ことに続絵の作例に注目しつつ、いくつかの考察をおこないたい。

栄之が作画した黄表紙挿絵の作例は限定されるが、その署名の形状を分類することで、絵師による天明期錦絵作品の制作年代を整理することが可能である。なかでも遊女絵については、『吉原細見』をもとに年代を特定することができ、これらにより栄之固有の画風形成に至るまでの変遷を辿ると、寛政四年後期の時点で既に長身で清麗な独自の美人像が成立していることが確認できる。伊勢物語に取材する錦絵三枚続《見立筒井筒》には「寛政五丑年」の年紀を伴う版（米国メトロポリタン美術館蔵）があるが、当該作例は新春に販売された可能性が高く、実質的な制作は同四年中であつたと推測される。ほかにも寛政四年に制作されたとみられる作例が認められることから、これら具体的な考証結果を積み重ねつつ、栄之画風の確立期を寛政四年後期であると提示したい。その上で発表者は、いわゆる栄之美人が歌麿の大首絵作例よりも前に成立した事実についての確認をおこない、歌麿との相互の影響関係についても考察したい。

栄之は、奥絵師・木挽町狩野家の栄川院典信門人と伝えられるが、正統な狩野派の図様を学んだ成果は、その錦絵作例にも反映しているものと思量される。天明後期から版行された錦絵「風流やつし源氏」の連作では、とりわけその初期の作例に独自の「やつし」手法が用いられることが指摘できる。栄之の古典趣味についてはしばしば言及されてきたものの、その内容については踏み込んだ考察がおこなわれていない。このため、今回発表者は「風流やつし源氏」における「やつし」の手法を、総体としてのいわゆる「源氏絵」の文脈のなかで捉えなおすことにより、栄之の独創的表現に関する考察を加えたい。具体的には、栄之が重層的イメージや当世風美人に姿を変える一般的な浮世絵の「やつし」手法のみならず、土佐派・狩野派など伝統的な「源氏絵」の図様と場面集約、屏風絵の画面構成などを学んだ上で、それらを巧みに織り交ぜながら浮世絵版画に応用、昇華させている点を新たに指摘したい。